



Data
監督：アスガー・ファルハディ
出演：シャハブ・ホセイニ／タラ
ネ・アリドゥスティ／パバ
ク・カリミ／モジュタバ・ピ
ルサデー

👁️👁️ みどころ

トランプ大統領の入国禁止令に抗議して、監督と主演女優がアカデミー賞外国語映画賞の授賞式への出席をボイコット。そんな話題に乗るまでもなく、イランのアスガー・ファルハディ監督の本作は、『彼女が消えた浜辺』（09年）、『別離』（11年）、『ある過去の行方』（13年）に続いて必見！同じイラン人監督ジャッフル・パナヒの、風刺にあふれた『人生タクシー』（15年）も面白かったが、こちらは、超一級のサスペンスと人間ドラマに！

引っ越し先の賃貸アパートで、妻に暴行傷害を加えたのは一体誰？犯人探しに躍起となる夫と、コトを公にしたくない妻との溝が深まりすれ違いが多くなる中、犯人探しのミステリーは佳境に。そして、やっと探し当てた真犯人とは・・・？

しかし、コトの真相究明にはどこまで意味が・・・？タイトルの意味を含め、内在するたくさんのポイントをしっかり勉強しながら、その面白さをたっぷり味わいたい。

———— * ———— * ———— * ———— * ———— * ———— * ———— * ———— * ———— *

■□■このイラン人監督作品は必見！■□■

去る5月14日に見たイラン人監督ジャッフル・パナヒの『人生タクシー』（15年）は風刺いっぱいの面白い映画だった。パナヒ監督は検閲が厳しいイラン政府から20年間の映画製作禁止処分を受けている中でぎりぎりOKの映画を同作で作ったわけだ。他方、同じイラン人で1972年生まれのアスガー・ファルハディ監督の作品も、『彼女が消えた浜辺』（09年）をはじめ観て、その構成本力のすごさにびっくり（『シネマールーム25』8

3頁参照)。当然星五つをつけたが、その後の『別離』（11年）（『シネマルーム28』68頁参照）、『ある過去の行方』（13年）（『シネマルーム33』113頁参照）も、その出来は素晴らしく、両者とも星5つだった。

本作が第89回アカデミー賞外国語映画賞のイラン代表に選ばれているとの事前情報を得て、そんなファルハディ監督の作品は必見！そう思っていると、2017年1月に就任したトランプ大統領が、イランを含む特定7ヶ国からの入国制限を命ずる大統領令を定めたことに抗議して、ファルハディ監督と主演女優タラネ・アリドゥスティが授賞式へのボーイコットを表明したというニュースが日本でも大きく報道された。そして、その渦中で本作が予想通り見事第89回アカデミー賞外国語映画賞を受賞したから、本作の話題は一層大きくなった。

そんなイラン人監督ファルハディの最新作は必見！劇場はひょっとして満席？そう思ったが、意外に席は空いていた。しかし、作品の出来はそりゃ素晴らしいの一言！

■□■今のイランはどんな国？主人公たちの生活は？■□■

パナヒ監督の『人生タクシー』を見た時は、タクシーへの相乗り制度を含めてイランのタクシー制度が面白かったし、パナヒ監督自身が運転手を務めるタクシーが走り回っているイラン市内の近代的な姿にびっくりさせられた。そのイランでは、5月7日のフランス、5月9日の韓国に続いて、5月19日に大統領選挙が行われ、穏健派のロウハニ氏が当選したが、今のイランという国の状況（発展状況）はどうなっているの？

本作の主人公エマッド（シャハブ・ホセイニ）は高校の国語教師で、妻のラナ（タラネ・アリドゥスティ）は専業主婦。この2人は、2人とも地域の小さな劇団に入って活動しており、今はアーサー・ミラーの『セールスマンの死』という劇に取り組んでいた。もっとも、本作がエマッドとラナ夫妻の日常生活を描くのは少し経ってからで、本作冒頭は「みんな逃げて！早く外へ！」というシークエンスから始まるので、それに注目！アパート（マンション？）が倒壊しそうだというシチュエーションを考えると、誰でも地震の発生を考えるが、本作はそうではなく、これは隣の敷地で行われている強引な建築工事のせい。そのためエマッド夫妻が住むアパート全体が倒壊の危機にさらされ、住人が一斉に避難する騒ぎになったらしいというからびっくり！都市計画法や建築基準法をはじめ厳しい都市法制度の中にある日本ではそんなハチャメチャな事態は考えられないし、何でも中国共産党と地方政府の幹部の意思によって早期に都市計画の決定がなされる中国でも、本作冒頭のようなハチャメチャな建築工事は考えられない。しかし、今のイランでは、そんなことが本当にあるの？

倒壊の危機にあるアパートから逃れたエマッド夫婦は、当然新たなアパートを探さなければならぬが、劇団仲間のババク（ハバク・カミリ）の紹介で新たな賃貸物件に入居したところから、本作のミステリー色いっぱいの人間ドラマが展開していくことになる。も

ちろん本作では、そのメインストーリーの構成力に注目だが、都市問題・住宅問題をライフワークにしている私が注目するのは、エマッド夫妻の住居事情だ。倒壊しそうだという前のアパートもそれなりに広く設備は近代的だったし、前の住人がいかかわしい女だったという新たな賃貸アパートも十分な広さと設備を整えているから、テヘランの住宅事情は東京よりはるかに良さそうだ。『人生タクシー』でも市内の道路事情や道路走ってる車の綺麗さにびっくりしたが、それは本作でも同じ。ラナがヒジャブ（スカーフ）を巻きつけているところだけは、イランはイスラム教の国なのだと実感させてくれるが、現代化された今のイラン、ましてやその首都のテヘランでは、その近代化と主人公たちの近代化された生活にしっかり注目したい。他方、都市や道路や住宅が近代化しても、日本人の心の中は？その価値感は？

■タイトルの意味は？背景事情の勉強もしっかりと！■

アーサー・ミラーの戯曲『セールスマンの死』は1947年に発表され、1949年にニューヨークで初演された有名な演劇だそうだが、残念ながら私はそれを知らない。本作を鑑賞する観客も、それを知っている人は少ないはずだ。エマッドが主人公を演じ、ラナがその妻役を演じる演劇『セールスマンの死』の稽古風景とその本番シーンは、『恋に落ちたシェイクスピア』（98年）と同じような「劇中劇」として何度か小出し（？）で登場するのでそれに注目！もちろん、その内容を知っているに越したことはないが、たとえ知らなくても本作の面白さが理解できないわけではないので、ご心配なく。ただ、前述したように、本作の主人公エマッドは高校の国語教師でセールスマンではないのに、なぜ本作が『セールスマン』というタイトルに？

パナヒ監督の『人生タクシー』の原題はシンプルな『TAXI』だったが、邦題の『人生タクシー』はいかにも作品の内容にふさわしい意識でグッドだった。しかし本作は、英題も『The Salesman』なら、邦題もシンプルな『セールスマン』。そこに修飾語をつけるのはきっとファルハディ監督の狙いに反することになるから、意識はダメだったはずだ。本作は、ファルハディ監督の『彼女が消えた浜辺』『別離』『ある過去の行方』と同じようなミステリー心理サスペンスとして一級品のドラマに仕上がっているが、一つ一つのシークエンスの意味を掘り下げれば、面白いテーマがいっぱい含まれてる。

例えばそれは、『セールスマンの死』の稽古シーンに出てくる、赤いコートの女・サナム（ミナ・サダティ）の存在感とその意味だ。本作のホントの面白さとその奥深さを把握するためには、それら背景事情をしっかり理解することが不可欠。そして、そのためには、本作のパンフレットにある①大場正明（評論家）の「他者の視線と見えない女」、②酒井洋子（翻訳家）の「アーサー・ミラーの「セールスマンの死」からひもとく『セールスマン』」、③山崎（鈴木）和美（横浜国立大学准教授）の「映画『セールスマン』が映し出す現代イランの家族と女性」、④小野正嗣（作家）の「過不足しかない言葉の壁に囲まれて」もしつ

かり勉強することが大切だ。

■□登場しない前の住人、見せない演出の冴えに注目！■□

前述した大場正明氏のREVIEW「他者の視線と見えない女」は、本作の第1のポイントとして、「物語にちりばめられた勘違いやボタンの掛け違い」を挙げている。本作は、エマッドとラナ夫妻がババクの紹介で前入居者がいかかわしい女だったという賃貸アパートに引っ越した後、ラナに起きた暴行傷害事件と、エマッドによるその犯人捜しを巡るサスペンス劇。その事件は、インターホンが鳴ったため、てっきりエマッドが戻ってきたと勘違いしたラナが、玄関ドアを開けばなしにしておいたために生じたものだから、ある意味ラナの自己責任（過失）。

本作の脚本を書き、監督・制作したファルハディがすごいのは、スクリーン上にアパートに住んでいた前の住人（いかかわしい女？）の姿を一切登場させず、ラナの暴行傷害シーンも一切見せないことだ。かつて1970年代に一世を風靡した日活ロマンポルノなら、前述したストーリーは絶好だから、風呂場にいる裸の（？）ラナに対する暴行傷害、場合によればレイプシーンを丹念に描くはずだが、本作ではスクリーン上に姿を見せない前の住人を訪ねてアパートにやってきた暴行傷害犯と暴行傷害シーンを見せない演出が冴えわたっている。そのため観客は、本作鑑賞中ずっとこのアパートの前入居者とその女を訪ねてやってきた（？）犯人の姿を自分で想像しながらスクリーンに集中せざるを得ないことになる。

もっとも、本作後半以降は、コロンボ刑事ばりのエマッドの素人調査が見事にハマリ、暴行犯を探し当てるが、さて、それは一体誰・・・？

■□夫の執念は犯人探しに！しかし妻は？そのすれ違いは？■□

本作中盤以降は、劇団員としての活動はしっかり続けているものの学校教師の仕事はかなりおろそかになったエマッドが、犯人探しに執念を燃やすストーリーが描かれていく。

最初のヒントは、「アパートの前の入居者はいかかわしい女だった」という隣人の言葉。法的にはそんな言葉に何の証拠能力もないから、それに依拠して捜査を進めていくのはダメだが、にわか仕立ての素人探偵たるエマッドの場合は仕方ない。さらにエマッドは、犯人がソファの上に置き忘れていった鍵束をたどることによって、その1つがアパート近く止めてあった白い軽トラの鍵であることを発見したからすごい。さらに、階段に残された足跡をよく見ると、犯人は足に怪我を負っているようだ。なるほど、なるほど・・・？ そんな執念で犯人探しに努力した結果、トラックの所有者の割り出しが決め手となり、エマッドはついにある日、パン屋で働く若い男マジッド（モジュタバ・ピルサデー）にたどり着くことに。

ここまでのエマッドの素人探偵ぶりはお見事だが、さて、エマッドのそんな犯人探しの

執念にラナは拍手してくれたの？日本では近時、①刑の下限を懲役3年から5年に引き上げ、②起訴する際に被害者の告訴を必要とする定めをなくす等の「性犯罪の厳罰化」を図る改正刑法が成立したが、性犯罪被害を受けた女性にとっては、その事件をどこまで公にするか、それ自体が大問題。しかして、エマッドがみせる犯人探しの執念に対して、コトを公にしたいラナの方は・・・？そんなすれ違いの結果、互いの人間性に対する信頼感は・・・？さらに、この事件まで仲の良かった2人の夫婦仲は・・・？

■□■真犯人は意外にも？真相究明の意味は？■□■

いわゆる推理小説は、犯人探しの面白さがポイント。また、刑事もの、ミステリーものでも、犯人探しの面白さがポイントになることが多い。しかして、本作中盤から後半にかけては、まさにその犯人探しの面白さがいっぱいだ。もし犯人がエマッドの推理通りパン屋で働く若者マジッドだったら、やっぱりラナのあの事件は暴行傷害だけではなく、レイプも含まれていたのでは？

そう思うのは当然だが、本作では犯人はマジッドではなく、近々マジッドが妻として迎えることになっている娘の父親で、マジッドの雇い主である初老の男だということがわかるから、アレレ・・・？しかもこの男は年齢も年齢なら、心臓に持病を抱えているらしく、下手に興奮させると死んでしまう恐れがあるから、その犯罪の追及の仕方は難しい。現にこの男を部屋に閉じ込めたまま、エマッドが劇団の方でひと芝居をして帰ってみると・・・？このように、本作ラストは犯人探しの面白さだけでなく、犯人の意外性とその犯人の犯罪をエマッドが「裁く」ことから生まれてくる様々な矛盾と夫婦の葛藤が重要なテーマとして浮上してくるので、それに注目！

やっぱり、こんな刑事事件に素人が刑事兼裁判官の役割を果たすのはやめて、警察に任せの方がいいのでは・・・？そう思える面もあるが、やはりエマッドがこうせざるを得なかったことは、私にはよく理解できる。しかし、努力の甲斐あって犯人を発見し、その罪を裁くことができて、結局そのことの是非は・・・？そして、やっと辿りついた真相究明の意味は？

2017（平成29）年7月3日記